

ドイツ語標準発音の新しい規範

田 中 宏 幸

1982年東ドイツ、ライプチヒで新しい発音辞典 *Grosses Wörterbuch der deutschen Aussprache* (以下 GWA と略す) が刊行された。これは、しかし 1964 年に初版を上梓し 1974 年まで 4 版を重ねた *Wörterbuch der deutschen Aussprache* (以下 WDA と略す) の大々的な改訂版に他ならない。従って、その規範記述の根本的な立場・方法は全く変わっていない。これらについては、既にその初版に基づいて、その「一般ドイツ語標準発音」 *allgemeine deutsche Hochlautung* の規範・問題点などに関連して、かなり詳細に報告したので⁽¹⁾、ここでは立入らないことにする。同辞典は、その後 1969 年に判をやや小型にし、いくらかの改訂・補足を施して再版を刊行したが⁽²⁾、それ以後は大きな変更は加えられなかった。これに対し今回、それ以後の研究・調査などに基づき、解説部でもかなりの変更・補足が行われ、また辞書部でも多数の新しい語が補われ、かなりの改訂・増補となった。ページ数にして解説部は 18 ページ、辞書部は 50 ページ増加している。このような事情から「ドイツ語大発音辞典」という新しいタイトルのもとに刊行されたのである。

その大きな特色は、まず、今日ますます退化ないし弱化している *r* 音、及び [ə] 音の消失及びこれに伴う同化などの、より現実的な規範を前面ないし中心において記述している点にある。次に、このような音声現象とも関連するが、今回始めてコミュニケーション状況の諸条件に起因する発音の文体的ないしレベル上のヴァリエーションに注目し、いわゆる「文(単位)音声学的」 *satzphonetisch* な観点から、より緩和された発音規範のヴァリエーションについて記述している点にある。更に、これ以外に外来語の記述がより詳細になり、また一部改訂され、またアクセントの説明が補充拡大され記述順など一部変更された。

大体の改訂のポイントは以上の通りであるが、この規範は、一貫して *Standardaussprache* と称されることになった。この術語自体初版でも並行して用いられていたが⁽³⁾、 *allgemeine deutsche Hochlautung* が主体であった。今回この *Hochlautung* という術語は姿を消した。この語は我国では「標準発音」と通常訳されているが、元来 *hoch* には「上層」な

(1) 文献表 13 参照

(2) WDA² の主たる改訂は以下において関連で紹介するが、二重母音の連結記号や無声化記号、その他参照ナンバーの導入などが注目される。なお Duden 再版では二重母音と破擦音に連結記号を付している。

(3) 例えば WDA¹, 11. 以下文献の後の数字はページを指す。

いし「高層」の意味があり GWA によると、エリート的言語運用への暗示や社会的にかけはなれたレベルという誤解を避けるために廃止されたもののようである。因に Duden は 1974 年の再版では一般の規範は *Standardaussprache* と称され、これは書名のサブ・タイトルでも用いられている。なお Duden ではこれに「舞台発音」*Bühnenaussprache* を加えて両者をまとめて *Hochlautung* とし、これに「口語発音」*Umgangslautung* と「誇張発音」*Überlautung* をまとめた *Nichthochlautung* を対置している。少々曖昧であるが *Standardaussprache* はやはり「標準発音」と訳さざるをえない。必要がある場合は原語で区別するしかない。

以下この GWA の「標準発音」の規範の新しく改訂された部分の概要について報告する⁽⁴⁾。

1 r 音について

Siebs の理想的規範の舌先音の [r] は今日ほとんど用いられず、これに代る口蓋垂震音の [R] もまた摩擦音 [ʁ] に弱化しつつあり、他方音節末の位置では、大幅に母音化の傾向を示すのが現代の発音の一般的情况であるが、GWA はこの r 音について次のような規範を記述している。

- 1 標準発音では次の位置で摩擦音-r が支配的であるが、口蓋垂音-R も可能である。
舌先音-r が用いられるのは非常に稀である。発音表記ではすべて 3 音は一つの記号 [r] で表わされる。
 1. 1 音節初頭の r 及び rh の綴りで
 1. 2 母音前の閉鎖音及び摩擦音の後の r の綴りで
 1. 3 短母音の後の r の綴りで (但し er-, her-, ver-, zer- の接頭辞を除く)
 1. 4 長い a の後の r の綴りで
- 2 曖昧な中舌母音 [ɐ] が発音されるのは
 2. 1 アクセントの無い接頭辞 er-, her-, ver-, zer- などの er の綴りで
 2. 2 アクセントの無い接尾辞 -er で
- 3 (非音節的) 曖昧中舌母音 [ɐ] が発音されるのは長母音 (a を除く) の後の r の綴り (GWA, 54f.)

従って Radio, bereuen, Rhombus, kehren; bringen, Frieden; bemerken, Narr; Haar, Bart などで [ʁ] ないし [R] が、erzählen, hervor; Hafer, klappern, Lehrers などで [ɐ] が、また er, Uhr, Natur, umgekehrt などでは [ɐ] が用いられるということに

(4) ただしアクセントについてはここでは取扱わない。この度の改訂では特に合成語の記述が詳細になっている。

なる。

以上の規範は基本的には WDA と同じであるが、いくつかの変更がみられる。先ずここでは [ɐ] が支配的で [r] はほとんど用いられないとされ、摩擦音が最も一般的な規範とされているが、WDA ではこれら 3 異音は「同等に」*gleichberechtigt* 通用するとされ、かなり抽象的であった。今回は現実的規範 [ɐ] をまず優先しているわけで、このことは発音法説明にも反映され、WDA では [r], [R], [ɐ] の順であったのが、[ɐ], [R], [r] と入換えられている。しかし、実際の表記には誤解の恐れがないから [r] が辞書部でも終始用いられている。せっかく国際音声字母を用いるのであれば [ɐ] を用いてもよかったであろう。

第二の相違点は 1. 4 の規定である。つまり WDA では長母音 [ɑ:] の後の r の音も母音化するとされていた。ただし、再版からは、変更され α の後では母音化は稀、という記述が加わった。それが、今回は完全に母音化しないという規範記述となったわけである。恐らく一般発音の慣習規範はそうなのであろう。従って WDA 初版では Haar が Uhr などと共に母音化する例として挙げられていたが、再版以後この語は削除され、今回、母音化しない規定となり Bart, bewahrheiten などと共に 1. 4 に示されることになった。

次に 2 の母音化については WDA では「母音的解消」の傾向として説明され、その結果「曖昧中舌母音」*dunkler Mittelzungenvokal* が発音されるとしていた。その際「前の長母音の代用延長」*Ersatzdehnung* の傾向も説明されている。これは α 音の延長を主に指しているが、この表現は再版以後も残されていた。この傾向はまた接尾辞 -er でもみられるが、これについては「r が完全に解消し e と共に一つの中舌母音として発音される」と説明していた。これらの傾向は辞書部では [r] または [ər] をイタリックで示すことにより暗示されていた。またこの両者での音声的な差異については何も説明されていない。今回この「傾向」という抽象的な説明に代って明確な音声記号 [ɐ], 及び [ɐ̯] を用いて記述している点が新しい。前者は音節形成母音であり、後者は非音節形成母音、つまり音節副音として発音される音を示している。この音声記号は辞書部でも用いられ実際の規範を、より明確に示している。この新しい母音については r 音の項で調音法が詳細に記述されている。

唇はゆるく開く。歯間は音声環境に従う。舌端は下の門歯に触れている。中舌が適度に硬口蓋に向ってもち上げられ曖昧な母音の響きが生ずる。音色はそれぞれの長母音（α を除く）の後で変化するが、特に [a], [ɑ] 及び [ɔ] の中間の音色を示すが、[ɛ], [œ] の傾向も帯る。…… (GWA, 53)

この母音はしかし er の場合と r の場合では、音色はほとんど同じであるが「主観的知覚によれば」量的な差異が存在するとされ、前者の方が後者よりも聴覚的には長いと感じられると記述されている。従って前者は [ɐ], 後者は [ɐ̯] と区別されている。この [ɐ̯] は音節を形成しない母音であるが、国際音声字母では通常 [ɐ] を用いる。Duden 再版はこれ

に従い [ɐ] と [ɐ̯] でこの両者を区別している。因にこの長母音 + [ɐ̯] というタイプの一種の二重母音は現代ドイツ語発音の目立つ特色でもある。ところで、このような説明と区別が改められたほか、先述の長い a 音の後の規範以外にもう一つ注目すべき改訂がある。それは 2. 1 の規範である。これは WDA では er-, her-, ver- などでは r のみが母音化するとされていた。それが今回は er が融合して [ɐ̯] と発音されるとなっている。この結果は辞書部でも Erfolg [ɐ̯'fɔlk], herbei [hɐ̯'bae], Verband [fɐ̯'bant] という記述になって現われている。これが現実の規範なのであろうか。

GWA の規範変更は以上のようなものであるが、これは全体的にみれば、大体 1974 年の Duden 再版 (52 f.) の規範に近い。例えば、ここでも摩擦音の r 音、つまり [ʀ] が放送関係、演劇関係の職業的話者の発音であるが、しかし [R] もしばしば聞かれる、ただし舌先音、つまり [r, ɾ] は少ないとしている⁽⁵⁾。もちろん明確な発音では [R], [r] も用いられ、また声楽では舌先音が用いられると付記している。一方、母音化については先述のように記号は異なるが、ほぼ同じ扱いとなっている。ただし Duden では a 音の後でも原則的には母音化を認め辞書部でもこの規範が示されている。ただし解説では [ɐ̯] の代りに [ʀ] を発音してもいいとされ、明確な発音では摩擦音 r が好まれるとし、また他方この場合 [R] や [r] はあまり用いられないとしている。また類似の説明として Bier などでは [bi:ɐ̯] で弱い [ɐ̯] が示されている。もう一つの相違は er-, ver- などの規範である。Duden はここで herbei [hɛɐ̯'baɪ], Verlust [fɛɐ̯'lʊst] という規範を示す。これは表記は異なるが大体 WDA と同じものである。

ところで、声楽で舌先音が用いられるという記述は、もちろん WDA でも今回の GWA でも共通している。WDA では摩擦音や口蓋垂音、母音化は避けられるべきだとされている。今回の GWA は、しかし舌先音の使用が支配的だが、一定の位置では母音化もみられるという実状を記述している。それに対し [R], [ʀ] は稀であるという表現で和らげている。以下母音化傾向を示す音声環境などが記述されているが略する。また、声楽でも、より通俗的な分野では [R], [ʀ], それに母音化もしばしば用いられているという記述も加えている⁽⁶⁾。

なお Siebs は 19 版の「準標準発音」*gemässigte Hochlautung* の段階で摩擦音の r を認めているが、母音化はごく僅か例外的にしか認めていない。この詳細については拙論（文献表 14）を参照されたい。

(5) [r] は舌先弾き音で [ɾ] の震えが弾くように 1 回だけ行われる。

(6) WDA¹, 98; WDA^{2,4}, GWA, 129

2 [ə] 音の消失

既にアクセントのない er でもみられたように、今日この弱母音は消失ないし同化しやすいということ、そして Siebs の規範が多くの場合、理想にすぎないということはよく知られているところである。GWA はこの母音の発音に関して次のような規範を示している。

- 1 弱母音の e [ə] が発音されるのは
 1. 1 接頭辞 be-, ge- の e の綴りと
 1. 2 語末とアクセントのないドイツ語本来の接尾辞の e の綴りで
 - 2 語尾 -en における弱母音 e [ə] の実現は先行音により規定される。
 2. 1 弱母音 e が発音されるのは
 2. 1. 1 鼻子音 ([m], [n], [ŋ]), [l], [r] 及び [j] の後
 2. 1. 2 母音の後
 2. 2 弱母音 e が消失するのは摩擦音 [f], [v], [s], [z], [ʃ], [ʒ], [ç], [x] 及び [pf], [ts] の後(後続の n は音節化する)。同じことは語尾 -em にも通ずる。縮小語尾 -chen では常に [ə] は発音される。
 2. 3 閉鎖音 ([p], [b], [t], [d], [k], [g]) の後では一般に弱母音 e は発音されない。もし発話情況(テンポ, 語の強調)が要求する場合は実現される。…… e の消失の場合は閉鎖音は鼻音的に開放され両唇閉鎖音 ([p], [b]) では [ɱ] は [m] に, 軟口蓋閉鎖音 ([k], [g]) では [ŋ] に同化される。閉鎖音の鼻腔開放は消失してはならない。
- 例外: 語尾結合 -igen では [ən] は常に保持され, -iken では最後から 3 番目にアクセントがある語では保持される。語尾重複の場合, 前の語尾の摩擦音・閉鎖音の後の弱母音 e のみ消失する。
- 3 語尾 -el における弱母音 e の実現は先行音により規定される。
 3. 1 母音及び [g], [l], [r] の後では発音される。
 3. 2 弱母音 e は鼻子音([m], [n], [ŋ]), 摩擦音[f], [s], [z], [ʃ], [ʒ], [ç], [x], 破擦音([pf], [ts]) 及び閉鎖音 [p], [b], [t], [d], [k] の後で消失する。e の消失により l は音節的になり, [t], [d] は側面開放され音節化した ɫ が続く。(GWA, 35f.)

すなわち berichten の be-; Hilfe, Atem, leitet; そして en については nehmen, fehlen; hauen, sehen それに Mädchen の -chen などでは e は消失しない。また el については Knäuel, Riegel などでは消失しない。これに対し laufend, lesen, suchen, kämpfen; diesem, welchem では e が消失し n, m が音節化する。また el では Rassel, Mittel, vermitteln などでは e は消失し l が音節化する。また leben などでは通常は消失同化するが, 場

合によっては保持されることもあるというわけである。ここでいう同化は *haben* [ˈha:b̥m], *wegen* [ˈve:g̥] のように [ŋ] が先行音の唇音や軟口蓋音の調音位置に同化されて [m, ŋ] に変化することをいう。閉鎖音の鼻腔開放とは、閉鎖音が通常の口腔で破裂をひき起さないで、呼気が鼻腔にのみ抜けることで開放されることを指すが、これが消失してはならないというのは要するに [ˈle:b̥m] などの発音が [le:m] に退化・弱化しないようにということである。さらに *berichtigen*, *Basiliken* では e は保持され、*rettenden* などでは [ˈrɛt̥ɪd̥ən] となるわけである。

この記述も大半は WDA と同じである。ただ前回「発話情況が許せば……消失してもいい」とされていた表現が今回は消失する方が中心となり、摩擦音では消失する方の規範のみが示され、閉鎖音では逆に「情況が要求すれば実現される」と改めた⁽⁷⁾。これは辞書部にも反映され摩擦音では *laufend* [ˈlaʊf̥nt̪], *lesen* [ˈle:z̥n̪] とのみ記述されている。他方閉鎖音の場合は *leben* [ˈle:b̥m od. ~bən] と記述され、消失する方の規範が先に示され、明確な方は後に併記という形になっている。WDA では、これらはただ [ə] をイタリックで示すことにより消失を、また同化は先行子音をもイタリックにすることで暗示していた。つまり GWA では、より現実的規範が中心となっていることが分かる。

Siebs の標準発音ではもちろん [ə] の消失は全く許されない。しかし 19 版のいわゆる「準標準発音」のレベルでは、かなりの消失が認められ、細部の相違はあるが、かなり WDA 或いは GWA と一致した規範が示され、これは辞書部でも理想的規範である「純粹標準発音」*reine Hochlautung* の規範の後に併記されている。この詳細については先述の拙論（文献表14）を参照されたい。

Duden の初版もまた Siebs の理想的規範と同様この音の消失同化は認めていなかった。ただ解説の部で「口語発音」のレベルの記述でこの消失が説明されている。Duden 再版は、これに対しその標準発音の規範としてこの [ə] 音の消失をとりいれた。すなわち「正常」*normal* な発音で [əm, ən, əl] は或る一定の位置で [m̥, n̥, l̥] と発音されると記述している。しかし、おそいか明確な発音では [əm, ən, əl] が用いられると付記している⁽⁸⁾。以上は基本的にほとんど GWA の規範記述と一致している。辞書部では前者の消失形のみが記載されている。ただし [ŋ] の先行子音への同化は示されないし、また GWA にみられる閉鎖音の後の完全形の併記はない。どちらかといえば、かなり画一的に消失形が記載されているわけである。規範そのものの相違点を挙げると GWA では [g] の後の [əl] の [ə] は消失しないことになっているが Duden では例えば *Bügel* [ˈby:g̊l̥] と記述され消失することになっている。また Duden の [p̥m̥, b̥m̥, k̥j̥, g̊j̥] は [t, d, n, l, s, z, ʃ, dʒ] の前では少ないという説明は GWA にはない。このような相違があるにしても GWA と Duden

(7) WDA⁴, 32f.

(8) Duden², 32ff.

再版の規範はほとんど一致している。これが現代の一般の発音規範であろう。

3 有声閉鎖音・摩擦音の無声化

これらの子音を常に有声で発音するという Siebs の規範もまた一般的でない。しばしば無声の軟音が聞かれる。この傾向について WDA はかなり現実的な規範を示していたが、根本的には GWA も変っていない。ただし前回の拙論（文献表13）は 1964 年の初版に基づいて報告したので再版以後の変更について、ここで紹介しておきたい。まず初版では辞書部ではこの無声化は考慮されていなかったのが、再版では [。] で明示されることになった。ただし語頭に関しては実際の音声環境が不定であるせいか、この記号の記載はない。これに合せて、解説部の同化の説明にこの記号についての指示が追加され、さらに、子音の一般的規則の最後に「有声度の弱化」について次のような記述が加えられた⁽⁹⁾。

有声の閉鎖・摩擦音が無声音に続くとその有声度は連続調音により弱くなる。[3] は外来音と感じられ有声度は意識的に保持されるため、あまり無声化しない。……

この再版と今回の GWA はほとんど相違はない。絶対的な初頭位置、つまり発話の最初または休止の後の語頭では「過度の有声度はいずれの場合も逸脱と感じられる」という注目すべき記述も同じである⁽¹⁰⁾。

常に有声を要求する Siebs も、その 19 版でとりいれる「準標準発音」では母音間、有声子音と母音間で有声とされる他は無声音でいいとされる。そして、これは辞書部でも考慮され、この段階の Siebs は時に WDA, GWA の規範よりも緩い。なお詳細については先述の拙論（文献表14）を参照されたい。

一方 Duden 再版（54）は [b, d, g, v, z, ʒ, j, dʒ.] は無声子音 [p, t, k, f, s, ʃ, ç, x, pf, ts, tʃ] の後では弱い有声が無声であるとしている。これ以外の位置では有声とされる。GWA との相違点は語頭と [3] に関する場合である。また辞書部ではこの無声化は示されていない。

4 外来語の発音

WDA はドイツ語の調音基底 *Artikulationsbasis* による、いわゆる「準ドイツ語化」*gemässigte Eindeutschung* の原則で外来語の緩やかなドイツ語への同化統合の規範を示したが、これは個々の単語例は別として、全体的にみれば極めて現実的な規範体系を示したといえる。これについては今回の WDA でも原則は変わらない。従って拙論（文献表13）で

(9) WDA^{2,4}, 45 及び 68 参照

(10) WDA¹, 65; WDA^{2,4}, 68; GWA, 72

既に報告したので、この原則については略し、その変更・改訂について、その概要を示すにとどめる。

まず解説部の分量が20ページから約4割増えて28ページとなった。それは、新にヴェトナム語の説明が加えられ、また、いくつかの外国語の記述が詳細になったことによる。例えば英語は、ほぼ倍増、ロシア語は16行の説明のみであったのが約2ページに及ぶキリル文字を含む詳細な一覧表が付加されている。規範自体の変更では英語についてはWDAで示されていた[w]が今回削除され、新に二重母音[ɛɪ]が取入れられ、またロシア語などに関して新たに[j]が記述されている。

[w]は両唇有声摩擦音としてWashington, Whig, Quebecなどのw, wh, quで発音されるものとされていた。もっとも、これらの綴りの一部ではWeekend, Whiskyのように完全に同化した[v]も規範とされていた。この音は今回非音節的母音[ũ]と改められた。[ʊɔ̃]ɪtp od. ũ~tən], [ũik], [küi'bək]とされている。WDAで[v]のみであった[ʷi:k|ɛnt]は[ʷi:k|ɛnt]と改められているのは別の理由によるが、Whiskyでは前回[v]と[w]が併記されていたが、今回後者は[ũ]となった。[w]の発音解説も削除された。因にDuden²ではそれぞれ[w-, v/w-, kw-, v/w-, v/w], またSiebs¹⁹ではすべて[w]とされている。しかし[w]と[ũ]は近い音であるから大した問題はない。Duden² (107)も「大体非音節的[u]」と説明している。

新に加えられた

二重母音[ɛɪ]は開いた短いe[ɛ]と開いた短いi[i]とからなる。移行運動が両者を一音節の単位に結合する。移行運動の間に音勢が減ずる。下降二重母音。(GWA, 46)と説明されている。例えばDaily Express[ˈdɛɪlɪ ɪksˈprɛs], Mayflower[ˈmɛɪ fləʊə]などとされる。これはWDAでは[de:-, me:-]のように[e:]であった。この音はDudenでは[ei], Siebs¹⁹では[ei]とされGWAに近い。

[j]はロシア語などの口蓋化を示すために用いられる。WDAではアクセントのある音節でだけ[j]で示されていたのが改められ、ほとんど全てのいわゆる「軟子音」にこれが示されている。例えばBreshnewはWDAでは[ˈbrɛʒnɛf]であったが、今回は[ˈbrɛʒnʲɛf]となっている。またKareninaは[kəˈre:ninaː]と同化した発音が示されていたが今回はこの例も記載されるが、まず[kəˈrʲe:nʲina]が示されている。今回はスラヴ語の子音のこの口蓋化に特に配慮したようである。一般により詳細になっている。Duden²は[ˈbrɛʃnɛf, brɛʃnjɛf; russ. ˈbrɛʒnɪf], Siebs¹⁹は[ˈbrɛʒnɪf]となっていて、どうもすっきりしない感がある。これが実状であろうか。

5 標準発音の文体的ヴァリエント

実際の発音行為は実に様々な状況のもとに実行されるから、当然その音相には、各種の要因に基づく様々な様式的ないし段階的な相違が現われてくる。GWA はこのような相違を「文体的ヴァリエント」と称し、これについて新しい研究・調査に基づいた4ページ強の解説を新たに加えた。これは標準発音における発音の諸情況に起因する発音規範の様式的ヴァリエントについての解説であるが、音の弱化と同化的衰退の現象が3段階の様式的区分に従って記述されている。この3区分というのは

- 1 朗読及び莊重嚴肅な講演の発音
- 2 散文文学作品や放送関係における原稿の朗読の発音
- 3 静かな事務的な会話や緊張度の少ない講演の発音 (GWA, 73)

である。そして1～3の順にアクセントのない音節、語、語群で音の衰退・退化ないし省略・消失の程度が増加するとされる。これは、要するにどの言語にでも恐らく共通してみられると思われる発音の明確さともいえるべき基準による様々なレベルのおおまかな区分であろう。このレベルの差異にさらに発音のテンポなどの要因が加わるが、これには早い「プレスト形」*Presto-Form* とノーマルか比較的遅い「レント形」*Lento-Form* が区別されている。このような様式的な差異は演劇や映画などの発音でもみられるが、ここでは、このすべての段階が現われるとしている。ところで、この辞典は3段階の第一のレベルを規範記述の中心においている。最初に置かれている一般的発音解説は従って、この段階の規範に関するものであり、辞書部でも各語につきこのレベルの規範が示されている。しかし2, 3の段階については、ただ、この解説の部分でのみ記述されている。その概要を示そう。

まず2のレベルでは次のような音声的特色がみられるという。

- 1 r はプレスト形では長・短母音、特に [a:] の後で全面的に同化される。
- 2 語尾 -en は鼻子音、流音、母音の後で（緊張度が少なくなるとともに）しばしば母音が消失し m, n の後では n は完全に同化される。多くの場合鼻子音の後で [鼻子音の] 延長がみられる。kommen ['kɔmən] → [kɔm:] 閉鎖音の後では [ən] は主として同化された（母音のない）形で現われる。音節初頭の b, d, g の同化は稀で haben [ham] でのみいくらか頻繁にみられる。
- 3 p, t, k は1のレベルに比べて帯気音が大幅に減少、例えば [f], [s] の後の [p], [t] などで軟音化がみられる。[p, b; t, d] はそれぞれ [m; n] の前で鼻腔開放、[t, d] は [l] の前で側面開放。閉鎖音連続では先行音の破裂は略される。Markt, hab' das
- 4 b, d, g はプレスト形では母音間でしばしば摩擦音化する。-ige, aber

5 プレスト形として曖昧母音や弱化母音をもつ退化形がしばしば現われる。

6 語頭での母音の新しい声立は人称代名詞、接続詞などの早い語群では実現されない公算が大きい。(WDA, 74)

まず1のr音はプレスト形という限定はあるが1のレベルでの長母音の後に加えて短母音の後でも [ʳ] になること、また [a:] の後ではこの母音の延長で実現されるということを示している。後者は WDA の初版では認められていた規範である。Duden 再版はこのレベルの規範は標準発音ではなく口語発音として記述している。Siebs は母音化については a 音の後についてのみ日常発音 *Alltagslautung* として記述している。-en に関しては1のレベルで消失しないとされた場合である。つまり、この2の段階では -en の母音は全面的に消失するということになる。さらに鼻子音は同化延長されるわけである。Duden はこの傾向も口語発音としている。閉鎖音の摩擦音化は、より経済的な発音を目指しているが、-ige [-igə] → [-iyə], aber ['a:βɐ] などの発音を指す⁽¹¹⁾。しかし、この傾向については Kohler (217) などは d では舌先の閉鎖が割合容易なので保持されるとしている。GWA もここでは d の例は挙げていない。なお、この傾向については Duden, Siebs には全く触れられていない。これ以外の3, 5, 6の現象は容易に想像されるところである。

3のレベルでは

- 1 r はさらに弱化、摩擦音 r の無摩擦音化の傾向が明らかとなる、短母音の後の母音化が特徴、早い発話では支配的。
- 2 -en は鼻子音や流音の後でも専ら母音を伴わない、完全な実現は、せいぜい特別に（アクセントを伴う）遅い発音か情緒的な延長の際にのみみられる。アクセントのない早い語群の有声閉鎖音の後の同化では閉鎖音の全面的同化に至る。このような縮約形は特にいくつかの助動詞で支配的 (haben, werden, würden)。
- 3 p, t, k は大幅な帯気音の消失と共に軟音化する、特に [s, ʃ] の後で、しかし他の摩擦音の後でも。プレスト形では僅かの有声度加わる。nicht, ist, bist, und などの語で語末の t がしばしば脱落。同調音位置の鼻子音の前では鼻腔開放は瞬間的声門閉鎖に替えられる。やや早い発話においても、連続する2閉鎖音の先行音は閉鎖段階までしか実現されないか (gehabt, gelegt) ただ弱い破裂しかみられないのが普通。3閉鎖音の連続では中間音、また大抵は第1音も破裂は実現されない (Marktplatz)。[p, t, k] は [b, d, g] の前では形態素間・語間でも完全に無声となるのは稀 (entdecken)。
- 4 b, d, g はアクセントがない位置かプレスト形の母音間で相当する摩擦音で実現される (habe, oder, sage)。母音の代りに流音が先行する場合もみられる (halbes,

(11) なお GWA はここで音声記号を示していない。また弱形のリスト (76) では [w] を用いているが、やや不正確で、有声両唇摩擦音は通常 [β] を用いる。

arges)。

- 5 無声摩擦音はプレスト形及びアクセントのない位置で、ますます軟音化する、特に [ʃ, s] の前で (ich stehe)。[pf, ts] の弱化はしばしば [f, s] に至る。
- 6 冠詞、代名詞、接続詞、前置詞の縮約形の用法(76 ページのリスト参照)。冠詞 den, dem, des 及び es はどの位置でも [ə] で発音されうる。den は前置詞の後ではしばしば母音が消失 (auf den [aof dŋ])。同化により (überm, unterm への類推で) überm, aufn, untern のような縮約形が可能であり、この綴りもみられる。der は前置詞の後では [de] が当然のように思われる。wir と er の弱化母音による発音はプレスト形として、または前接的 *enklitisch* にのみ可能。ich の母音のない形は絶対的な発話の初頭のプレスト形としてのみ現われる。接続詞の完全形、縮約形の現われ方には特別な規則はない。数詞のなかで und は [ən] を経てしばしば [ŋ] となる。
- 7 声立に関しては密接な結合 *enge Bindung* が支配的となり、これはすべての早い語群で規則的 *obligatorisch* であるように思われる。(GWA, 74f.)

というような音声的特徴を示すとされている。

摩擦音 r の無摩擦音化とは要するに後舌と口蓋垂の接近が緩くなることを指している。かかる音は音声学的には無摩擦継続音とか接近音と称されるが r 音に関しては特別の音声記号はない。短母音の後の母音化は、われわれも実際の会話などの発音でしばしば耳にするところであるが、このレベルでは従って母音 + [ɐ] のタイプの二重母音が特徴ということになろう。また 1 の段階ではみられない閉鎖音の消失が記述されている。p, t, k はここでは [ʃ, s] の後ばかりでなく hoffte, rechte のような他の摩擦音の後でも軟音化する。また entdecken などの t は有声化するというわけである。有声閉鎖音の摩擦音化は 2 の段階でも早い場合にみられたが、ここでは d の例として oder が示され、また母音間だけでなく流音と母音の間でもみられるとしている。摩擦音の軟音化や破擦音の摩擦音化はこの段階にのみ記述されている。形式語の縮約形ないし弱形の一部はもちろん 1, 2 の段階でも聞かれるが当然 3 のレベルでは頻繁になるであろう。これについては 37 語のリストが別に示されている。ただし残念ながら、これは辞書部には記載されていない。

以上のような、かなり緩和された段階の規範ないし傾向については詳細な比較は略するが、大体 Siebs, Duden では口語発音ないし日常発音、そして一部は方言的なレベルとされている。

文体的ヴァリエントの解説の最後に頻繁に用いられる弱化形式 *schwache (reduzierte) Formen* のリストが示されている (76ff.)。そして、すべての場合アクセントがないこと、そして母音の質的变化はまた大抵、母音の短縮も伴うことが説かれている。リストでは 1~4 のナンバーが付されているが、それは次のように説明されている。

1 1 及び 2 の段階のレント形

2 1のプレスト形では稀であるが2ではより頻繁

3 3のプレスト形, レント形では稀

4 3のプレスト形

ナンバーが付されていない場合は, これらの段階に共通して用いられる形。また (°) は非常に短いプレスト形における母音的 r の全面的同化の可能性を示す。

いくつかの例を示すと

er	[e:°] ¹	[e°] ² [ɛ(°)] ²	[ɐ] ^{3,4}
wir	[vi:°] ¹	[vi°] ² [vɪ(°)] ²	
der	[de:°] ¹	[de°] ² [dɛ(°)] ² [dɐ] ^{2,3}	
aber	[a:bɐ] [abɐ]	[əwɐ] ²	
haben	[ha:bɪ] [ha:bɪ]		[ham] ³
werden	[ve:°dɪ] [ve:°n]	[ve°n] [vɛ°n] ²	

などである。なお, さらに母音短縮は nach, wegen, zu, wieder, nur, hier, zwar, gar, nie, da, wo などでも可能性があると付記されている。

これらの弱形についてはさらに Kohler (219~230) でも詳細に説かれている。なお「弱形」*schwache Formen* は英語の *weak form* によるもののようである。周知のように Jones の *English Pronouncing Dictionary* には *strong form* の後に, しばしばこの弱形が示されている。

さて, このような解説の一章は新しく加えられたものであるが, しかし, WDA は以前から「調音様式は……発話状況の必要に応じて用いられる速度, 強弱, 緊張度, リズムなどの音声的手段により影響される」(WDA¹, 64) とか「発話状況が許すなら……消失しうる」などの表現にみられる通り実際の音声言語の多様な表現状況を考慮していた。いわゆる「連続調音」*Koartikulation* についての解説の一章は主に, この観点からの諸音相に向けられていた⁽¹²⁾。今回の新版でもこの章は残されているが, 旧版で「標準発音」では許されない発音としていた部分が削除され, 必要に応じて新たに er-, her- などの [ɐ] についての記述が, 調音様式の適応による同化の項に追加された。以前許されないとされていた発音のうち [pf, ts] の [f, s] のような破擦音の摩擦音化のみ, 上にみたように今回3のレベルで許容されるものとして取上げられることになった。これ以外のケースは今回も許容されていない。それには例えば *anbeissen* の n の b への逆行的同化, つまり [m] と発音する場合や *Eisschrank* などの s の消失, *liegen* の g を [j] と発音するケース, Sigma の g を逆行的に鼻子音同化するなどの傾向が含まれる。

GWA の文体的ヴァリエーションについての説明は大体以上の通りであるが, 必ずしもわれ

(12) WDA¹, 63~65, WDA^{2,4}, 64~68; GWA, 69~72

われには明確なものとはなっていない。もちろん発音規範というものの性質上、それは致し方ないかもしれない。しかし、なにしろレベルの区別にテンポが関連しているので複雑である。GWA はさらに外国人も弱化した音声形式を完全形と同様に心得ておくこと、そして発音できるということは必要だし、このことは特に形式語について通用すると述べている。確かにそうであろう。とすれば辞書部にもこの弱形ないし縮約形をも記載すべきであったろう。

6 参照ナンバー *Kennzahlen*

GWA の発音規範の改訂点の概要は以上の通りであるが、最後に辞書部で用いられている参照ナンバーについて紹介しておきたい。これは WDA でも再版以後配慮されていたものである。この初版では辞書部の発音規範の記述を補うものとして解説部のページ数がしばしば付記されていたが、再版以後これは 10 項の規則にまとめられ識別ナンバーがそえられ利用しやすくなった。今回の GWA でもこれが踏襲されている。ただし 1 から 6 までは規範改訂により音声現象は同じであるが、規則としては書換えられている。そしてさらに 11, 12 が新しく加えられた。この概要を示すと

- 1 例 rufen [ˈru:fŋ] 摩擦音・破擦音の後の -en, -em の [ə] の消失
- 2 例 haben [ˈha:bŋ] od. [ˈha:bən] 閉鎖音の後の -en における [ə] の消失・同化
- 3 例 Schlüssel [ˈʃlysʃ] -el における [ə] の消失の規則
- 4 例 Lehrer [ˈle:rə] 語尾 -er の母音化の規則
- 5 例 Meer [meːʳ] [a:] 以外の長母音の後の r の母音化の規則
- 6 例 Versuch [fɛːzu:x] 接頭辞 er-, her- などの er についての発音
- 7 例 volllaufen [ˈfɔlʌoŋ] 合成語などでの同一子音の連続での弱化の規則
- 8 例 Abbau [ˈap̥baʊ], Aufgabe [ˈaʊfɡ̊a:bə] 無声閉鎖・摩擦音の後での有声閉鎖・摩擦音の無声化の規則
- 9 例 'unmöglich, un'möglich; 'übersetzen, über'setzen アクセントの併存
- 10 例 engagieren [aŋɡ̊aːzi:rən] od. [ãɡ̊aːzi:rən] ドイツ語化の進んでいない外来語での、より原語に近い発音の併記
- 11 例 Besuchow [bʲɛːzu:xɔf] ロシア語や他のスラブ語で現われる口蓋化現象
- 12 例 dem [dem] アクセントのない形式語などでの母音弱化 (GWA, 148ff.)

ここで 11 は本稿 4 で紹介した音声現象に関するものであり、12 は 5 の文体的ヴァリエーションに関するものである。もっとも、この 12 というナンバーは辞書部では十分に活用されていない。例えば mir, es, ich, des, und, denn, haben などにこのナンバーは記載されてい

ない。今のところ誤植の一種かとも思われる。誤植といえは参照ナンバーの説明の発音記号などや弱化形のリストにも誤植がある。これ以外の7～9はWDAと全く同じ、また10は例語が換えられただけで内容は等しい。この方法はいずれにしても便利である。なお、今回さらに発音記号のリストを記載したカードを別に付録としているが、WDAではこれは巻末に折込みで収められていたものである。このカードの裏面に以上の参照ナンバーの規則も記載されれば一層便利になると思う。

Siebsの明確過ぎる発音規範が理想にすぎないということは周知の事実であり、より現実的な規範は既にWDA, Duden再版, Siebsの「標準発音」などで示されたが、以上のような今回のGWAの改訂は、さらにアクチュアルな現状を示している点で意義がある。このような現実については、われわれも大いに注意を払う必要がある。少なくとも聞く立場では、このような実地的な規範を充分心得ておかななくてはならないし、また慣れておく必要があろう。例えばr音での母音化の傾向は我国でも一般的に認識されているが、今回のer-, ver-などの母音化の傾向は注目しておかななくてはならない。ただし、これをすぐ教育面で取入れる必要があるかどうかについては、もう少し検討を要するであろう。他方口蓋垂音のrについては、かなり知られているが、この摩擦音については十分に認識されていない。調音位置が日本語のラ行子音や英語のr音と離れているため取扱いにくい。しかし多分[R, ʁ]により関心を向ける必要があろう。またenなどの音節子音化や形式語の弱化形式などにも充分注意を払う必要が感じられる。同様WDAの規範と変ってはいないが有声閉鎖・摩擦音の無声化なども少なくとも聴覚的には慣れる必要があると思われる。

このようにGWAは現代の現実的発音を記述してはいるが、なお一般的にみられる[ɛ:]の[e:]による発音やchの[k]など、その頻度からいえばこのレヴェルの規範のヴァリエーションとして記述される必要があろうし、さらに外来語に関しては、確かに外国語音を平然と記載しているSiebsに比べればその「準ドイツ語化」は成功しているといえるが、具体的には、より一般的な規範の記述が必要であろう。例えば[θ, ð]等は正確には発音されないであろうし、また単音がドイツ語の調音基底に適っていても外国式の子音結合などは恐らく発音が困難であろう。なお、辞書部では、さらに固有名詞や活用形、派生語、合成語などを追加し、さらに先にも述べたごとく弱化形も記載することが望まれよう。

とはいえ、現在もっともアクチュアルで信頼できる発音辞典として多くの関係者に歓迎されるものであることは確実である。

引用・参考文献

以下は本稿に引用、または今回新たに参考にした文献のみを挙げるにとどめる。他の関連文献については以下の拙論13の文献表など参照されたい。

(1) ドイツ語発音辞典 (刊行順)

- 1 Siebs Deutsche Hochsprache. Bühnenaussprache. Berlin 1957¹⁶, 1962¹⁸, 1969¹⁹ (=4)
- 2 Duden Aussprachewörterbuch. Der Grosse Duden Bd. 6. Mannheim 1962¹, 1974² (=5)
- 3 WDA=Wörterbuch der deutschen Aussprache. Leipzig 1964¹, 1969², 1974⁴
- 4 Siebs Deutsche Aussprache. Reine und gemässigte Hochlautung mit Aussprachewörterbuch. Berlin 1969¹⁹
- 5 Duden Aussprachewörterbuch. Wörterbuch der deutschen Standardaussprache. Der Grosse Duden Bd. 6. Mannheim 1974²
- 6 GWA=Grosses Wörterbuch der deutschen Aussprache. Leipzig 1982

(2) その他の文献

- 7 Drodowski/Henne: Tendenzen der deutschen Gegenwartssprache. In: LGL
- 8 Eggers, Hans: Deutsche Standardsprache des 19./20. Jahrhunderts. In: LGL
- 9 Glinz, Hans: Deutsche Standardsprache der Gegenwart. In: LGL
- 10 Jones, Daniel: English Pronouncing Dictitnary. London 1963¹²
- 11 Kohler, Klaus J.: Einführung in die Phonetik des Deutschen. Berlin 1977
- 12 LGL=Lexikon der Germanistischen Linguistik. Tübingen 1980²
- 13 田中宏幸: 「一般ドイツ語標準発音」ーライブチヒ版発音辞典の特色ー金沢大学教養部論集・人文科学篇 6 号 (1968) 所収
- 14 ー: 「緩和された標準発音」ジーブス発音辞典の改訂とドイツ語規範発音の最近の成果 同論集 8 号 (1970) 所収

Hiroyuki TANAKA: Die neue Norm der deutschen Standardaussprache. *Anfrage direkt an den Verfasser richten. Anschrift: Seminar für Germanistik, Universität Kanazawa, Marunouchi 1-1, Kanazawa 920, Japan*